せたかむい No.106
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇六号（一日発行）
平成十年七月一日

年表で読む 古平の歴史

《14》

■場所請負人のその後

時代が大きく変わって明治二年、開拓使から、これまで百五十年以上も続いてきた場所請負制の廃止命令が出されました。

古平場所では廃止命令の出る三年前の慶応二年に、すでに岡田家から、種田徳之丞ら三人が場所の権利を譲り受けていましたが、請負人に対しては何の補償もなく、一般の出稼人と変わらない身分になってしまいました。

しかし、明治維新で藩が県に代わった時、藩主を取りあえず知事に任命したように、元請負人の中には開拓使の役人に任命された者もおりました。

種田徳之丞は、開拓権少主典という下級役人に任命されましたが、その職にはつかなかったようです。

■場所譲渡のいきさつ

岡田家が、種田徳之丞らに場所を譲りたいと願い出た文書が残っています。おおよそのことをまとめて見ますと、

「私どもはこれまでヲタルナイ、フルヒラ場所を請け負ってきましたが、漁場も繁盛し、家族や大勢の召使いも大変ありがたいことと思っております。ところが、先に東蝦夷地も請負いましたがここは産物も不足し、フルヒラ場所などからの利益をもって償っておりました。ところが丑年（慶応元年）、事情が変わってヲタルナイ場所の請負いが出来なくなってしまいました。しかし私どもでは、すでに鰊漁業に必要な仕込みや手配なども終わっており、ヲタルナイの請負いをお願いいたしましたがご回答がありませんでした。その上、フルヒラ場所の運上金も増額になり、鰊漁も薄漁が続いていることから、まことに残念ですが有川村種田徳之丞という者と示談し、フルヒラと合わせて、東地エトモホロベツの請負いを任せることにいたしました。（略）」

収税品に押された焼印〈古平〉

■運上家廃止後の古平

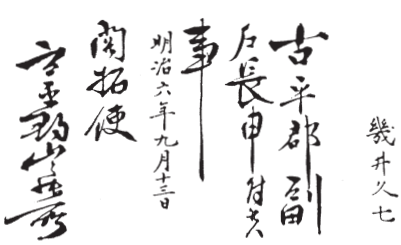
今までの運上家に代わって、開拓使が直接古平を治めるようになりましたが、そのころの様子を『新北海道史』などから見てみましょう。

運上家の使用人は明治三年四月から、本陣取締・帖役・手代などに、また同四年三月からは収税会所手代・小使として任用されましたが、元運上家支配人などは漁業経営や駅逓（町から町への荷物などの中継ぎ、後に郵便局の旧名称）の仕事をするようになりました。

種田徳之丞はこれより前の同三年四月から本陣用達となり、代人の喜三郎は年給八十両をもらっていたといいます。そして、同四年二月には、収税石高（税金として納められた主として漁獲物）の三分を受け取って本陣を委任され、さらに駅逓業務もやるようになりました。

■新しく戸長・副戸長制度

これまでは、昔通りの庄屋・名主・年寄などの名前が使われていましたが、新しい戸長制度が布告になりました。



副戸長を申し付けられる

遥かなる故郷の思い出
『古平弁』の話 ⑤

[46]

楠　羊我　春

古平弁が東京で役に立ってすごく得をしたこともある。

むかし、私が定年まで勤めていた日野自動車工業㈱はバス・トラック・ダンプカーなどを製造していた会社だが、世の中の景気がバブル崩壊前だったので、大型自動車は売れて売れて生産が全然間に合わなかった。連日のように地方の販売店からは、「早く車を送れ」という矢のような催促だが、それを製造する労働力不足で、現場をあずかる私も困り果ててしまった。こんなに大型車が売れるのはめったにない、まさに千載一隅のチャンスである。会社でも人事部が主体になって、人集めの担当者がチームを組んで、主として東北方面の職安へ人集めに出ているが、農閑期以外は遊んでいる人はなく、思うように人は集まらない。注文があるのに売る車がないというのは会社にとって大問題である。いよいよ人手不足は深刻な問題となってきていた。

すると、突如人事部から、この人手不足を解消する手段として、「各製造現場の長が自ら近県の職安を廻り、労働人員を確保されたし」。という要請が出された。

今までは、人をよこせと人事部の尻をたたいていたのが、今度は自分で人集めに行かなければならないはめになってしまった。車を製造することなら何とかなるが、人集めなどは経験のない未知の世界だ。これは大変なことになってしまった。全然知らない東北方面の都市の職安で、なんのコネもなく、この人手不足の世の中で果たして求職者が見つかるかどうか。まさか一人も見つかりませんでした、握りこぶしで帰社するわけにはいかない。考えただけで胃が痛くなってきたが、いつまでも悠長にしてはいられない。

人事部の担当者から聞いた話だと、周辺に農村が多くある都市の職安がよいという。また、彼らのしゃべる東北弁の半分は解らなくて困ったともいう。

「とにかく、月曜日から金曜日までの五日間で、一人か二人採用出来れば上出来ですよ。まあ、あまりあせらずにがんばって来てください。」

と言われた。

まずは東北本線の汽車に乗って北上し、花巻市→北上市→水沢市→一の関市→千厩町と南下して、人集めの旅となった。前日に花巻市に着き、ビジネスホテルに入り、職安の場所を確かめてから床についた。

翌朝、八時半ころ職安へ出向き、掃除をしていた若い職員に「今日は、期間工募集に来ましたのでよろしく」と、名刺と手土産をカウンターに置いて、まずさっと引き上げた。九時ころまで町をぶらぶらしてからまた職安に行ったが、求職者はまだ一人も来ていないという。ところが求人者控室には、東京方面から来た有名大会社の求人担当者が十人くらいも待っていた。各社とも人手不足で困っているのだ。

十時ころになって、やっと求職者がポチポチ現れた。しばらくして職安の受付係が、

「日野自動車さん、求職者ですよ。面接してください」

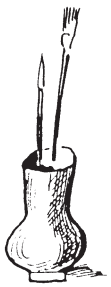
と、声がかかった。

職安の若い人が、

「日野自動車はどうかね」

と、話してくれたらしい。

このチャンスを逃してなるものか。相手は花巻の農家の主人だった。期間工としての待遇と給与を聞いてきたが、何しろすごいズーズー弁であった。これじゃぁ東京の連中には解らないわけだ。



私と猫たち

渡辺ハツエ

宅地内に、猫の額ほどの菜園を作って楽しんでいます。

五月初旬から、老骨にムチ打って畑を耕し、ヤレ肥料だ、堆肥だと、人並みにひと通りのものを買い集めて、少しの畑を有効に使おうと思い、物差しで計るような気配りで種まきをしました。

ある日、せっせと種をまき、翌朝に畑を見回って唖然としました。猫の足跡が無数にあり好き勝手に掘り返されていたのです。猫は土に穴を掘って、己の欲望を満たす習癖があると聞いてはいましたが、私が猫の額というものだから、自分の領域だと思っているのでは――と、苦笑せざるをえませんでした。猫に畑を荒らされたぐらいで畑まきはやめられません。私から畑をとったら何も残らないのです。

それから毎日が私と猫の根くらべになりましたが、夜でも目が見える猫にはとてもかないません。でも、ものは考えようだと思うようになりました。老いてなお元気で、猫を追っ払うたくましさで畑仕事のできる幸福を知りました。老人の適当な運動にはなるし、ボケ防止には最高です。秋の収穫を楽しみにして大いにがんばりたいと思っています。

今は住宅事情が良くなってねずみも話題になりませんが、私が小学生のころ、家の中にねずみが出て困ったことがありました。そんな時、亡母が知り合いから子猫を貰うことにしましたが、そこの小母さんが一匹残したら可哀想だというので、二匹貰って来ました。黒と白の混じったのと、それに茶色がかった三毛猫でした。二毛の方はおとなしくて可愛いかったのですが、三毛の方はすばしっこくて怖いような猫でした。亡母が庭の隅に砂を置いて猫のトイレを作ったところ、猫の習性なのでしょうか子猫はちゃんとそこに排便をして、上手に砂をかけておきます。しかし、そのうちにあけてふざけたり、そんな思い出があります。お正月とかお盆のころになると、たいていの家出は障子の張り替えをしたものです。

⇦（次ページ下段へ続く）

障子ものがたり

竹内コト

新しい建築の住宅になってから、だんだん障子を使う家が見られなくなりました。今では、お寺や昔風の住宅に見られるくらいで、一般には少なくなってきました。やわらかい和紙の感じが好きだといって日本間に障子を入れる家もありますが、断熱建築が盛んになって、あまり見かけなくなりました。

昔は、だれが来ているとか、親に叱られたりした時などはそうと障子のすき間からのぞいて見たり、また、指で障子に穴を

また、昔は作法のひとつとして、障子の開け方閉め方の作法がありました。

私は小学校を卒業すると当時はよくあった、札幌のある大きな実業家の家に行儀見習いに行きました。大きな家で、六間もある縁側の障子を毎朝はたきがけをします。八畳の座敷が三間続いていて、お客様によってお通しする座敷が違うのです。お客様の前に出るというので、奥さんからは障子の開け方、閉め

※（五ページ下段へ続く）

昔の暮らし二題

福井幸平

つぎはぎ

道路がよくなったせいか、このごろは自転車のパンクも減ったが、修理してもらうとケッコウな料金である。見ていると、修理のやり方は簡単にはなったようだが、しくみは昔のままで変わっていない。

思い出すと、昔は――といっても戦後の二十年代は、長ぐつやデンプンぐつなど、自転車のパンクを直すのと同じようなやり方で、何か所も何か所もゴムを張って修理し、少しでも長持ちさせながらはいていた。ただし修理していたのは自転車屋さんではなくくつ屋さんで、そのほかにも、修理専門の店が何軒かあったように記憶している。それと、裏地のついてない長ぐつには足の保温のために藁を入れたり、ナンバンを入れたりして、そんな当時のことを思い出す人もいるでしょう。

また、くつ下をはくようになったのは、男性も女性もそんな古いことではないと思う。われわれの時代はほとんどたびであった。それも洗っては繕い、また繕って、母やおばぁちゃんの愛情そのもので、今ではまったく考えられない。いつまでも履けるだけ履いて、形のある限り履いていた。

これもまた、古きよき時代を襲った、戦争中の耐乏生活の思い出でもある。

もっこ

私たちの小さいころはどこの家にももっこ（畚）があり、鰊漁場で使うものであったが、家庭のごみを捨てるのにもよく使っていた。

浜町では、土場といって材木置場であった跡がごみ捨て場になっていて、今でも土場と呼んでいる人がいる。子どものころは、もっこを背負ってよくゴミを捨てに行ったものだが、それにしても、今のようになんでもかんでも捨てるようなことはなかった新聞紙は畳の下に敷いたり、物を包む立派な包装紙であり、生ごみは土に埋めて肥料、糞尿にいたるまで、野菜作りの大事な肥料として利用していた。毎日、庭を掃いて出てくるごみなどは家庭で燃やして、特別な大掃除でもない限り、一か月に二回ぐらいごみ捨てをした記憶がある。

現在は、家電製品、家具、いろいろな容器類などなど、無駄と思われるような包装紙のほかにびんや缶が氾濫して、やれダイオキシンだの、発ガン物質だの、地球温暖化などと問題になっているようだ。また、産業廃棄物うんぬんと、地球社会も心もとなくなってきた。

ごみをもっこで捨てに行った少年時代が、何となく懐かしくなってきた。飽食の時代がよいのか、便利さが快楽なのか、スピードがよいのか、たまには考えてみたくなる。

⇦（前ページより続く）

一匹の猫が、トイレを使っていないことに気付きました。

その後、私は二毛の方を前掛けにくるんで、近くの空き地の草むらに捨てて来ました。そして分かったのは、トイレに排便しなかったのは三毛猫の方だったのです。

翌朝、夜の明けるのを待ちかね私は空き地へ行って、「ニーコ、ニーコ」と呼びました。すると二毛は、自分の捨てられた場所からどこへも行かずそこにいたのです。

草むらから出て来ると、私の足にからみついてニャーニャーとないています。思わず私は二毛を抱き上げてほほずりしました。可哀想に、なにも食べさせないでごめんね。

家へ帰ると、早速魚をたっぷりかけてご飯を与えました。子猫はむさぼるようにして、皿に盛ったご飯を残さず食べてしまったのです。

漁村の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【7】

大正二年

4／17　六時頃〈八から、昨晩十杯ほどとったので、もっこしょいに来てほしいと電話があり、妻が出かけた

4／18　鰊漁はなし、今年は海が静穏であったので、時化で網を揚げるような日は一日もなかった、大漁したところではツブシや粕たきに忙しい

4／19　沢江共同歩方二、三杯、△二十杯ほど、入舟町は〈メで十杯、〈八十杯、一〈で五杯、今までの古平の水揚げ高は二万五千石はかたいだろう、西村三杯、田中一杯、田岸二杯、港町方面は二、三杯というから、このへんが一番負けたようだ

4／21　今日も大漁、歌棄山中から前浜にかけて四十統ほどに漁、多い所は二十六、七杯、△は二枠もとる、〈中、㋕歩方十五杯、西村五杯、㊀八杯、田岸二杯、そのほかも皆とった。今まで二、三杯だった前浜もこれで元気が出た

4／22　就寝中外がガヤガヤするので起きてみると、この朝も漁があったとのこと。△十五、六杯、〈キ、〈中は一枠、そのほか前浜も二、三杯、刺網も五、六本宛てあったという、本年のような寒い年も大漁なのは珍しい、沢江の建網連中は平均五百から六百石、△などは三統で三千石以上もとった、実に未曾有の大漁だ

4／23　今朝も漁があった、△七、八杯、その他も二、三杯、浜はエライ景気だ

4／24　新聞は二十一日までの漁獲高をのせている、

寿都	二一．〇〇〇石
岩内	二五．〇〇〇石
美国	三四．〇〇〇石
積丹	三〇．〇〇〇石
古平	三五．〇〇〇石
余市	三二．〇〇〇石
高島	一四．〇〇〇石
厚田	六．〇〇〇石

4／25　三時頃から暴風になる、恐ろしいほどであったが夜明け頃より雨になる、全道で漁があり、鰊製品は一般に安値の予想、

4／28　丸山岬、本陣で一、二杯とれる、午後から風が強くなった、こんな時火事でもあれば大変、火防組合で注意して歩く

4／30　鰊漁は皆無、いよいよ終漁かもしれぬ、農園へ行きリンゴ、ナシの冬囲いをはずす、アサヅキをとって帰る

5／1　全道で大漁、八十余万石という、むしろが暴騰している、それに反して鰊製品の下落が著しい

5／25　手持ちの身欠きを斉藤さんが買いに来たので、十二貫を四円五十銭で売る、㊀より夏衣料売出しのビラ書きを頼まれる、五十枚ほど書く

―― 続く ――

※（三ページ下段より続く）

方、立ち居振るまい、お茶の出し方など教えられましたが、特に障子は静かに、音を立てないようにとみっちり指導されました。

辺りが暗くなると障子に影が映りますが、子どものころ、よくその影絵で遊んだものです。手で犬やきつね、あやとり、お手玉といろいろな形をつくって障子に写すのです。

昔話に、山奥の一軒家に住む白髪の鬼婆が旅人を殺そうと包丁を研いでいたら、その姿が障子に映ったのを見て、それで旅人は逃げ出すことができたなどと、そんな話を聞いたこともありました。

お天気の良い日に、白い障子を開けて外の空気を入れると、何となく人の心も和んでくるような気がします。私の家では、今は曇りガラスの戸ですが、何となく風情がありませんね。今も、昔使った障子紙を大切に保存しています。

―稲倉石の思い出―　⑩

山が怒り 川が襲った ③
嬉しかった数々のご協力

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

この災害に際し、多くの皆さんから有形無形のご協力をいただきました。

思い出すままに列挙し、御礼と感謝に代えたいと思います。

▲古平町役場▼

逸早く救援物資（食料・医薬品など）をご恵送され、「災害救助法」の適用と自衛隊の緊急派遣を要請されるなど、早期復興にご尽力下さいました。

ありがとうございました。

▲古平町消防団▼

崩壊家屋の解体や流雪の排除に、大きな力となって下さいました。

ありがとうございました。

▲古平町民の皆さん▼

皆さんから頂きましたお見舞いは、被災者や住民に励ましと勇気を与え、復興の心の支えとなりました。

ありがとうございました。

▲古平・余市警察署▼

災害・被害状況を細かく調査され、住民へのいたわりの言葉は、沈みがちな心に安堵の明かりをともして下さいました。

ありがとうございました。

▲自衛隊▼

被災当日の深夜、約三〇名のレンジャー部隊が雪崩の山道を乗り越え現地に到着。翌朝には約一〇〇名の陸上自衛隊員を派遣され、指揮官の指示のもと黙々とスコップをふるい復旧に立ちむかわれ、住民に大きな感銘を与えて下さいました。

後日、札幌郊外の自衛隊本部にお礼に伺った時、隊長さんが（昔の位では中将という偉い方だそうです）若造の私を出迎えられ、執務室で「これからも頑張って下さい」と励まして下さったお言葉は、今も忘れられません。

ありがとうございました。

▲札幌医大・胸部外科▼

テレビで惨事を知り、住民の安否を気遣われ、急遽医大から医師を派遣し、意識不明の運転手さんを手厚い処置で奇跡的に蘇生させて下さいました。

ありがとうございました。

▲社長さん・会社・労働組合▼

早速、社長さんと会社からのお見舞いを持参され、被災者と住民を励ましてくれた青柳鉱山部長さん。ありがとうございました。

組合からのお見舞いと復興へのご協力は、働く者の仲間意識のありがたさを身にしみて感じさせてくれました。

ありがとうございました。

▲住民の皆さん▼

あなた方の心配りは本当に嬉しかった。

・差し入れの「おにぎり」ありがとう。

・仮住まいを快く受け入れてくれてありがとう。

・鍋・釜・衣類を下さってありがとう。

・「教科書が流されちゃった」

「ノートも鉛筆もない」

と泣いていた子供に、教科書や文房具などをいっぱい贈ってくれたお友達の皆さんと学校の先生。

ありがとうございました。

×　×　×

三十余年前の惨事を偲びながら、多くの皆さんから賜りましたご援助と励ましに、改めてお礼を申し上げ、この稿を終筆致します。

皆さん、本当にありがとうございました。

（おわり）

古平ホトトギス会

春泥の猫の足ふく躾して　斉藤波留
春装うポスターの娘の笑顔かな　仲谷比呂子
遠足の背にあたゝかき玉子焼　仲谷安代
強東風や船の整備のまゝならず　大和田絵伊
露の世や苦楽共にす夫は亡く　仲谷美砂
山荘の花下の茶会に招かるゝ　水見句丈
のこり苗小さな花をつけてをり　福井幸平
盆梅の香りにすすむ朝餉かな　山口悦子
娘の忌日修め時雨の帰宅かな　大島喜恵
山々の襞現わるゝ雪解風　山口浪
虎杖の八尺ほどや空ばかり　長谷川和子
闇空にライトアップの花見連れ　斉藤睦子
夏も過ぎ積丹バスの空いてをり　岩瀬みのる
押し歩く車に座して日向ぼこ　越野スミ子
牡丹の開き初めたり早朝の庭　越野敏雄
音もなく降る雨の糸春浅し　越野清治
寄居虫の遊ぶ礁の忘れ潮　西島サツ子

古平町岬短歌会
六月詠草

長崎フユ

冬去りて畠の若芽伸び早く
天に向き高しネギ坊主ども

竹内コト

街燈の灯りに映えて花冷えの
続く夜に咲く桐の花見ゆ

池田テル

夫子らと住みしこの家守りをり
己がめぐりに心足りつつ

堀典子

公園の砂場に遊ぶ児らを見る
とほきとほき日の吾子と重ねて

榊佳代

あでやかに牡丹の咲くも束の間に
忽ち風に散るを惜しみぬ

丹後初江

家のまはりを自転車でかけゆく子等の声
しばらく振りに聞くは懐かし

ほらそこの指さす先のふきのとう　外山俊久

島宿の雛の祭に招せらる　中村樺宵

おとうとが一年生に入学だ小五水見翔人

せんせいになまえよばれたにゅうがくだ　小一水見玲央

川柳

石井愛子

ソーランの踊りに鰊の群来を見る

月冴えて背なの円みの影うつる

鼻うたで入れる里の湯の煙

渡辺ハツエ

夏休み婆待ちこがれ孫来る日

眠れぬ夜亡夫の遺影に話かけ

子どもニュース見て解ったと老いの知恵　(6/23)

北政道

握手する手も鍛えてる選挙前　(6/13)

年金と家計簿今日も対峙する　(6/19)

深呼吸ダイオキシンの中に住み　(6/22)

（　）は、北海タイムス川柳欄・柳壇入選作掲載月日

東美知

編集所へ行く道すがら仰ぎたり

北見先生のみ墓処アカシヤの咲く

魚屋友子

次々と物を思ひて寝つかれず

泣きたきこと又同胞のこと

鈴木時子

春来しと声をかけては施肥したる

セントポーリア紫の花

菅原節子

病院食に相応へる器それぞれを

褒め合ひながら箸運びをり

奥山きよみ

買物の袋を提げて風の中桜

吹雪に面伏せてゆく

堀勝治氏写真集

山口スエ

ふるびらの街の樹百選撮りためて

写真集編みぬ夢を果たして

春は桜秋は紅葉と樹の命

極まる姿つぶさに写して

ふるさとの海辺も山も変遷ゆくに

写真集繰りて思ひは深く